

人間構成の三区分法の展開と 「身体」を軸とした新しい学問への扉

久保 隆司

(ソマティック系独立研究者)

はじめに

歴史的に心身二元論と一元論の「対立」があるわけだが、本論考では、三区分法(三元論)に注目することで、「対立」をミニマイズし、多様な学問を統合する新しい包括的概念としての「アンソロポロジー」を提案するものである。

一 人間構成の三区分法と西洋世界での系譜 1

1 古代ギリシャの二元論と三元論—古代から中世へ—

ヨーロッパでは、古典的に二元論とボディ(肉体/身≡ソーマ)・マインド(心/魂≡プシュケ)・スピリット(霊性/精神/知性≡ヌース)から人間は構成されるという三区分法(三元論)が共に並走し、引き継がれてきた。プラトン主義の心身二元論に、キリスト教によって心身を総合する「霊」が導入され、「霊・魂・身体」の実体的三分法が定着したという解釈である。

金子は、「新約聖書は人間の全体を「からだ」(soma)によって意味する。somaは心身を含めた人間の全体を指している」という。たとえば、使徒パウロ(？-60頃)の身体観として、①身体は魂と同様に創造者からの賜物であり、ともに神の被造物であるから、身体と魂とのギリシア的二元論を排除する、②身体は「魂の牢獄」ではなく、「聖霊の宮」である、などの具体例をあげている(金子2008)。

「霊・魂・身体」の三分法は、新プラトン主義の影響を受けており、霊性・魂・身体の「人間学的三元論」の祖ともいえる古代のギリシャ教父オリゲネス(185頃-254頃)以来説かれたことでも知られる。プロティノスは、神秘的階梯を存在の五段階として説いた。一者(ト・ヘン)→知性(ヌース)→魂(プシュケ)→身体(ソーマ)→質料(ヒュレー)の五段階であるが、身体から知性を経て一者に向かう超越への動きがプロティノスの神秘哲学であった。このような新プラトン主義の考えは、ラテン教父アウグスティヌス(354-430)を通じて、キリスト教神学の体系化にも大きな影響を与えた。

2 ルネサンス期と三区分—中世から近世へ—

中世は、霊性・魂・身体の子つる区分はあれど、心身一元論的なアリストテレスの哲学を元としたスコラ哲学が大きな柱であった。中世から近世への準備期間ともいえるルネサンス期になると、哲学者たちは、プラトンのイデアや魂の不滅性の二元論的特徴に再び関心を寄せ、この時期には人間の二元論的な性質や魂の不滅性についての議論が復活した。ルネサンス期には、人間中心主義が台頭し、人間を神の創造物として捉える中世スコラ哲学の心身観とは異なり、人間を自己決定的な存在として捉えた。この考え方は、人間の自由意志や個性を重視することで、人間の尊厳を高めることを目的とする。またルネサンス期には、人間の身体や感覚に対する関心が高まり、身体や感覚を通じて世界を理解しようとの姿勢が見られた。遠近法はその代表例である。(大小)遠近法は、人間の視覚に着目した技法で、遠くのを小さく、近

くのを大きく描写することで立体感を表現する。遠近法以外にも、身体や感覚を通じて世界を理解する具体例としては、音楽やダンスなどが知られる。

二 人間構成の三区分法と西洋世界での系譜 2

1 近世における「理性」の進展と「霊性」の後退

「神」を前提としない近代合理主義はカントが確立した。その先駆は、「神」がまだ必要であった近世における近世合理主義の祖と位置づけられるルネ・デカルト（1596–1650）である。彼は、二元論の対立を解消するため、神（霊）を持ち出したので、三区分法を採用したといえる。『第一哲学に関する諸省察』（1641 年）の「魂」と「身体」は「神の働き」で松果体によってつながる基本構図は三区分と解釈できる。しかしながら、啓蒙時代の展開を通して、「理性」が神（霊性）に取って代わり、理性は身体の支配者となり、二元論的均衡は維持できなくなっていく。「理性」や「感性」を導き統合する根源的な機能としての「霊性」や「信仰」の力は背景に退き隠され、啓蒙時代後半には人々の目に見えなくなる。このような霊性の枯渇は後に無神論やニヒリズムへの転落を招く原因となる。

十八世紀後半のイマヌエル・カント（1724–1804）の『純粋理性批判』（1781 年）では、「理性・悟性・感性」の三区分法を採用した。「理性」は「霊性」から自立したが、それは科学技術と結びついた（道具化された）実証主義的「理性」の時代支配を意味した。近代精神医学は神経生理学的な姿勢が基本となり、いわゆるヒステリー症状は集合的な悪魔憑きが原因ではなく、個人的なレベルでの脳の機能不全である精神病と考えられるようになった。

2 近代精神医学における心理主義と身体主義の綱引き

十九世紀の精神医学の中心はドイツ語圏であった。そこではいわゆる精神（心理）論者（サイキッカー）と身体論者（ソマティック）の対立が注目される。ロマン派精神医学は、十九世紀前半、啓蒙期のヨーロッパにおける知性や合理性への信仰に対して、感情や非合理性を称揚する精神運動であるロマン主義の時代に現れた精神（心理）論派である。精神病とは心因性であり、身体的症状は副次的なものとされた。一方、解剖学的・生理学的側面を重視する身体論派はニューロン（神経細胞）説などの医学的発見（1888 年頃）もあり、世紀の後半に至る

にしたがって優位となった。この身体論派の流れは、十九世紀末から二十世紀初頭の精神医学における、オーストリアのジークムント・フロイト（1856–1939）やプロイアーの『ヒステリー研究』（1895 年）にはじまる深層心理学（ユングを含めた）の扉を開いた。ここに身体論者に対するロマン派精神医学の復権の意味合いも見出す者もいる。

三 橋渡しの三つの学問

—身体心理学・宗教心理学・医療人類学—

ここでの三つの主要な学問「医学（身体学）、宗教学、心理学」を統合する「橋渡しの学問」（間の学）のモデルを考えてみよう。相互に断絶している主軸となる三つの学問間を、橋渡しの学問によって全体をつなげる。すなわち、「身体」（医学）と「心理」（心理学）との間をつなげる学問を「身体心理学」（身心論が基盤）とする。「心理」（心理学）と「精神／霊性」（宗教学）との間をつなげる学問を「宗教心理学」（超越論が基盤）とする。「身体」（医学）と「精神／霊性」（宗教学）との間をつなげる学問を「医療人類学」（風土論が基盤）とする。イメージ図としては、三つの主な学問を頂点とする三角形であり、各辺上に橋渡しの学問が配置される。ただし、ここであげた諸学問は必ずしも現状のものに限定されない。

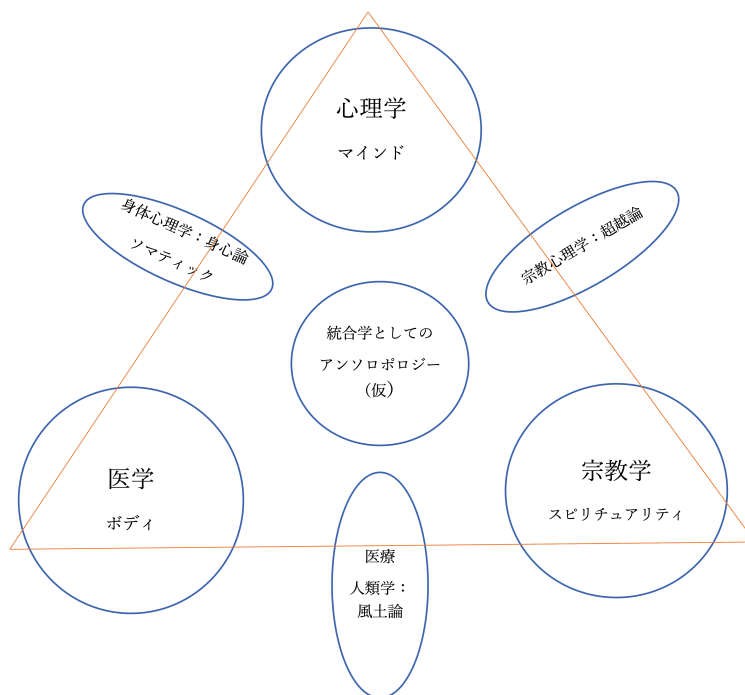
1 「ソマティック心理学」

—身体面と心理面（生理・体験での統合）—

ソマティック心理学（身体心理学）は、「ボディ・マインド・スピリット」の統合の観点から、臨床的なアプローチをする新しいホリスティックな分野で、東洋的な見方とも非常に親和性がある。西洋版「身心一如」の学問である。体験的／直感的に二元論が超克できる。

ソマティック心理学（＝「soma」＋「psyche」＋「logos」）は、soma（生き生きとした身体）と psyche（精神／魂）の両方の統合的な存在としての全人的な人間を研究する学問分野を意味する。一元論的な心身関係を重視する多様な手法の総称で、心理学の一分野である。共通する基本姿勢は、意識（または無意識）にアクセスするための効果的な窓口として、身体性（動作や感覚）に焦点をあてることである。通常のサイコセラピストに要求される言語的方法だけでなく、非言語的手法が統合的に使用される。

狭義のソマティック心理学／心理療法は、人間を癒し変容させるために、哲学、医学、その他の諸科学も用い



て、有機的全体性へと統合する一つの企てである。ソマティック心理療法は、身体中心的／現在中心的／感情中心的／体験中心的である。会話内容は中心ではなく、身体感覚、感情的な反応、緊張のような「今・ここ」での体験に取り組む。筋肉に働きかけるものからマインドフルネスの瞑想状態を使うものまで、様々な技法が活用される。身体への働きかけによって、感情と結びついている無意識的な記憶を効果的に意識化すること、つまりは身体・感情・心理の統合を図ることが療法の目的である。

近年、トラウマ／PTSDの心理療法として注目されている。幾度となく繰り返される体験パターンは、幼児期初期の体験から形成されたもので、辛い体験（トラウマの記憶）が成長の障害となる。それらは言語機能が成熟する以前に形成された非言語的な身体的記憶である。潜在記憶に深く刻み込まれており、クライエントの日常生活の気分や思考や行動に大きな影響を与えている。ソマティック心理療法は、もはや必要のない習性パターンの変化を援助し、成長の足かせとなった体験から自由にするを目的とする。

2 「宗教心理学」

—心理面と霊性面（信仰・直観での統合）—

①ユング心理学と象徴の力

宗教心理学の領域におけるユング心理学は、百年前から一貫して大きな影響力を維持してきた。カール・G・ユング（1875–1961）の「象徴」研究を通して、非キリス

ト教世界にも大きく開かれているからであろう。「集合的無意識」の概念は、一般的な臨床心理学の世界では受け入れられにくい、文化心理学における「ミーム」概念と重なる点もあろう。

ユングは人生の後半における精神的成熟「自己実現」のプロセスを重視する。意識と無意識との相互作用を通して心的調和・統合・十全性が成就される。「個性化」と呼んだその過程において、象徴は未来における自己実現を志向する心の創造的な働きを表出する。それも個人的な心理世界を超え、民族や人類などのより深層的な集合無意識のレベルでの普遍性を持つ象徴である。霊媒体質研究の『いわゆるオカルト現象の心理と病理』（1902年）が彼の学位論文であるが、死後に発表された自伝や『赤の書』を見るとオカルト的側面の影響が強いことは明らかである。松本（1979）は、「批判も多いが、少なくとも宗教的象徴を考察する上においてきわめて重要な洞察を含んでいる」と評価している。

②人間性回復運動とトランスパーソナル心理学

第二次大戦後の米国において、フロイトの精神分析学派（自我心理学）が精神医学の支柱的思想として受け入れられたのに対し、ユング心理学は長らく受け入れられなかった。米国でのユング心理学の流入は、人間性回復運動の中核を担った人間性心理学と共鳴した1970年代前後で、トランスパーソナル心理学の中核として位置づけられる。

トランスパーソナル心理学は、アブラハム・マズロー（1908-1970）の欲求の五段階説の頂点「自己実現」のさらに上の「自己超越」の段階を研究対象に含む。同じくマズローの「至高体験」の変性意識も研究対象となる。宗教や霊性、スピリチュアルな領域である。問題点としては、超越的な主観的（一人称的）な体験を重視するあまり、場合によっては自我肥大を助長する恐れもある。事実、1990年代半ば、この領域最大の思想家ケン・ウィルバー（1949-）は、一人称的な超越体験を過度に重視することは全体的なバランスに欠くとして、トランスパーソナル運動を批判、離脱した。一人称・二人称・三人称のバランスの取れた統合的な視点獲得を重視する独自のインテグラル理論を提唱した。

米国の近代哲学・心理学・宗教学・宗教心理学の父ともされるウィリアム・ジェームス（1842-1910）の『宗教的経験の諸相』（1901年）は宗教心理学の古典的な名著であり、これら二つの心理学にも大きな影響を与えてきた。しかし、本質的な宗教性／霊性の探究を目的とする「宗教学的宗教心理学」より、実証的研究を指向する「心理学的宗教心理学」者も多い。

3 「医療人類学」

—身体面と霊性面（多様性・多次元での統合）—

一般的に医療人類学は、病気や健康に関する人類学的研究分野であり、医学と人類学を結びつける学問である。医療の風土的・文化的多様性の理解を通して、健康問題や公衆衛生も包摂する医療の向上にも貢献できる。医療人類学は、宗教や霊性と密接に関係している。社会・集団における伝統的な疾病観念や治療行為、たとえば、病気治療における呪術やシャーマニズムも研究対象となる。宗教的信念の治療に対する影響、また宗教的儀式やそこで使用される神性な飲食物（薬草や薬酒など）の治療における役割などの調査研究も想定される。

医療人類学は、大きく二つの方向性、生物生態学的と社会文化的方向性から健康と病気を窓口に、「人間とは何か」をさまざまな問題を通して探究する学問である。たとえば、人類の進化、解剖学、小児科学、疫学、精神衛生、薬物の／乱用、健康と病気の意義、医療関係者の訓練、医療行政、病院組織と経営、医師-患者関係、伝統医学主体の共同体への近代西洋医学への導入の際の問題などを扱う人類学者が医療人類学者である（フォスター・アンダーソン 1987）。また、「医療人類学」の日本への導入者の一人・波平恵美子（1994）によると、医療人類学は理論と方法論を文化人類学によっている。文化人類学と

は、異なる文化を総合的に調査し分析する方法（フィールドワークなど）で、「人間とは何か」を問う学問である。それによって、人間の文化の普遍性と多様性の源流を明らかにしようとする。その応用学である医療人類学では、普遍の人体を持つ人間が、多様な病気観や治療方法や病人への支援制度を持つその様相を研究する。

二一世紀の世界において、文化的、ジェンダー的にも多様性が大きな課題となっており、医療人類学がますます重要性を増すことが予想される。世界中で医療システムが変化し、文化的多様性との葛藤がある中で、医療人類学は異なる文化間の理解を促進し、医療の質を向上させるために重要な役割を果たすことができるであろう。二〇世紀後半に注目された代替補完医療はこの領域での断絶回復に関わる研究といえる。さらに、二一世紀になって「サイケデリック・ルネッサンス」運動の潮流の中、うつ病や PTSD の症状に幻覚剤の活用が米国を中心に注目を浴びているが、身体と霊性の断絶の回復に本来的な意義があると考えられる。

なにより、文化人類学は、共同体における宗教儀式や心霊治療などを社会現象として、そしてそれが個人に与える意味の究明など霊性／スピリチュアリティ（オカルトを含む）を主題に扱うことは、心理学とは異なり、ごく当たり前の学問領域である。

四 学問の要として

「アンソロポロジー」に可能性はあるか

1 統合領域としてのアンソロポロジー

ドイツやフランスを主とする近代西欧哲学の文脈で、「アントロポロジー」と呼ばれてきた学問領域がある。日本語だと「人間学」もしくは「人類学」と訳される。近代においては、カントが「人間とは何か？」との根源的な問いかけをした講義をもとに 1798 年刊行の『実用的見地における人間学』を契機に学問の名称として定着したという。

ここでは、フランスにおける近代的な人間学は、十九世紀前後のメヌ・ド・ピラン（1766-1824）に始まると考える。フランス・スピリチュアリズムの系譜で、心身の合一を大きな主題として扱い、二〇世紀のアンリ・ベルクソン（1859-1941）、モーリス・メルロ＝ポンティ（1908-1961）にまで至る。ピランは、人間を理解する学問を三段階（下位段階は上位段階の基盤となり、上位は下位を包括する）で捉えた。生理学—心理学—人間学で

あり、人間学を包括的に高次な人間を捉える学問とした。日本では、禅も踏まえた身心論を重視した西田幾多郎（1870–1945）が、カントなどのドイツ哲学からベルクソンなどのフランス哲学に重心を移したことも意味深い。

2 「身体」を軸とした「アンソロポロジー」の提案

これまでの人間学は、歴史的にキリスト教神学との関係性が深い。今後はキリスト教に限らない「霊性」の視点の導入で、より現代的な多様性にも適応した学問領域として、広く受け入れられる可能性はある。この対応として、非キリスト教文化圏でも受け入れやすい霊・魂・身の三つが同時に存在する「身体」(SOMA)を軸に、学問の再構成／再構築を試みることを提案したい。

人間としての身体は、時代、地域、宗教、風土を超え、全人類に共通する。ホモ・サピエンスである以上、この数万年くらいはハードウェアとしての人体はほぼ同じである。また、いわゆる第一枢軸時代（紀元前 800–紀元前 200 年頃）から 2500 年前後（現在の私たちに至るまで）は同じ基本 OS を使用中と捉えてよいであろう。

おわりに—来たるべき時代と新しい学問像—

今の私たち自身に関わる問題でもあるが、二元論に基づく破壊や断絶の基本的な解決姿勢は、三区分法／三元論への積極的な関与となるのではないだろうか。本論考は、来たるべき時代に即した「アンソロポロジー」を、その三区分性に注目し、包括的／統合的に再構築できないか、という問いかけであった。身心を共通基盤とする新しい医学／心理学／宗教学の関係性を通して、「人間とは何か」をあらためて問い、理解する目的のために、これからの時代に不可欠な統合的な見方（哲学）について考える機会は大変である。それによって少なからぬ二元論の否定的側面に発する弊害が収まるだろう。身体心理学・宗教心理学・医療人類学による橋渡し／リエゾンの学問手法の導入と整備は、新しい時代の学問の基盤形成に重要と考える。

引用・参考文献

- G. M. フォスター・B. G. アンダーソン 中川米造（監訳）（1987）『医療人類学』リプロポート。
濱田秀伯（2021）『第三の精神医学—人間学が癒す身体・魂・霊』講談社。
金子晴勇（2008）『ヨーロッパ人間学の歴史—心身論の展開による研究』知泉書館。
久保隆司（2011）『ソマティック心理学』春秋社。
松本滋（1979）『宗教心理学』東京大学出版会。
波平恵美子（1994）『医療人類学入門』朝日新聞社。
プロティノス 田中美知太郎・水地宗明・田之頭鵬二（訳）（1987）『プロティノス全集 第三巻』中央公論社。

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

